

本



外国人レスラー最強列伝
門馬忠男/文春新書/994円

外国人レスラーから見た日本人論。

プロレスと聞くと、不思議な興奮の混じったノスタルジアを感じてしまう。なにしろ、娯楽の少ない時代にテレビが市民の家庭に入ってきたと、あつというまでに子どもを心をとらえてしまったからだ。力道山とルー・テーズはどちらが強かったのだろうか。子どもたちは喧々譁々の議論を繰り返した。これは永遠のテーマである。

角度から戦後日本プロレスの表像に迫っている。テーズこそ「プロレスの神様」だったという見方に同意する人は多い。あわせて、テーズは日本流に言えば宮本武蔵ともいえるべき求道者であり、人格的にも屈指のレスラーだったというのだ。軍隊でもプロレスを教える「武器をもたぬ格闘術」を兵士にたたきこんでいたというから凄くはないか。現役時代の職業を尊重する米軍の懐の深さである。著者は、これがアメリカの国力なんだ、と感嘆す

るが、そのとおりであろう。テーズは力道山とジャイアント馬場を深く愛していた。力道山の死に接すると、リング上で弔意を表し、静寂のなかで目頭を拭いた。馬場が死ぬと、プロモーターとしての馬場が優秀で契約金を必ず払う誠実な人物だったと回顧している。「これはこの業界ではとても大切なことで尊敬に値する」と。二人とも互いをもっとも尊敬していたというのは誇張ではない。

以上のプロレスラーはいなかった」と語るのには、ボボ・ブラジルである。馬場の連勝記録を破ったブラジルは、試合前に贈呈された花束から花びらを食いちぎり、大木金太郎の頭突きにココパットで対戦したヒール(悪役)のイメージが強い。リッキー・ワルドーが首を上げた大木のアトミック・ボムズ・ヘッドは、朝鮮でいう「平壤頭突き」から学んだものらしい。大木の石頭に對抗できたのはブラジルくらいだったのではないか。黒人レスラーの地位を向上させ、引退後はチャリティ活動に勤しみ、誰からも愛された。地元の目抜き通りは「ボボ・ブラジル・ストリート」と改名されたほどだ。ブラジルはじゅめアブドラー・ザ・ブッチャーから黒人レスラーが日本で存分に暴れることができ、人気もあつたのは、日本には人種差別という障害がなかったからだという指摘は、まことに感動的である。アメリカよりも日本のリングは、黒人選手にとって安心できる職場だったのだ。

ブッチャー、彼と悪党コンビを組んだインンドの狂虎、タイガー・ジェット・シン、アサツシンA・アサツシンBのコンビなど、著者にはまだまだ取り上げてほしいレスラーたちがいる。外国人レスラーを通して日本人論としても次回作を期待したい。●

文明の象徴、橋。その魅力と歴史をたどる。東京都建設局で多くの橋の建設に携わった、橋の専門家による本書。橋が架けられた経緯やかかわった人々、関東大震災での被害と復興、昭和以降に架け替え、新設された橋など、東京の橋の歴史を細かにたどる。川の上に東京の技術と文化の歴史を眺める。



橋を透して見た風景
紅林章夫/都政新報社/2484円

現代に楽しめる、江戸のまち歩き。東京のあちこちに今も面影を残す、江戸時代の名所や重要な場所を、著者自ら撮影した写真と切絵図で紹介する江戸版散歩本。浜離宮恩賜庭園の將軍お上がり場など、東京は歴史の香る場所にあふれている。



決定版 江戸散歩
山本博文/角川書店/1998円

今月の東京本



神吉拓郎傑作選 全2巻
1珠玉の短編・2食と暮らし編
大竹聡[編]/国書刊行会/各2160円



地図と愉しむ東京歴史散歩
地下の秘密篇
竹内正浩/中公新書/1015円

東京の「みえないもの」、地下と怨霊の世界。地形と道路をなぞって走っている東京の地下鉄。各線の深さの推移や違い、開通の経緯は興味深い。加えて、都心の地下壕、崇徳院の怨霊を祀った神社など、「みえない」世界の魅力に満ちた一冊。

現実と仮想のあわい。

建物が密集した東京の街のジオラマ。と思いきや、上空から俯瞰して撮影した東京の写真集である。大規模なプロジェクトも、本書の世界ではミニチュアを取り替えるようなもの。二〇二〇年に向けて再開発に沸く東京も、おちちやの騒ぎに思えてくる。



東京
本城直季
リトルモア/2700円